
銀魂～鬼刃の日常～

美緒奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂〜鬼刃の日常〜

【Nコード】

N9933X

【作者名】

美緒奈

【あらすじ】

真選組に入隊した彼女の笑える物語！気軽に立ち寄ってください

< ^ ^ >

＊少し編集しました。 11月7日

第一話初めはやっぱりこんなものでしょ？（前書き）

初めての投稿ですので少し甘めにみてやってください。

第一話初めはやっぱりこんなものでしょ？

やっと・・・やっと会える…江戸往きの列車の中で彼女はそうつぶやいた・・・

・・・ところ変わってここは幕府特別武装警察真選組屯所である。
今日この屯所ではあるうわさで持ちきりだった。

「なあ、知ってるか？あのうわさ。」

「ああ、なんでも女隊員が来るんだろ？」

「副長の知り合いらしいけど・・・美人かなあ」

「いや、どうせコネで来るんだしブスに決まってるだろ。」

「それもそうか。」

なんてうわさしてる中さっき名が挙がった真選組副局長土方十四郎はいつも以上に眼を吊り上げいらだっていた。

「あいつ遅すぎだろ。10時には江戸に着くつつつってたのに・・・」
イライラ

「まあ、落ち着けトシ。初めての街なんだ。少しぐらいいいじゃねーか。」

そう言って二カッと笑ったのは局長の近藤勲である。局長になだめられたらさすがの土方も黙るしかない。「ったく・・・」あきらめたようにタバコの煙を吐いた。

第一話初めはやっぱりこんなものでしょ？（後書き）

どんな短い感想でもいいですのでお願いします。

第二話ヒロイン登場!!です。(前書き)

なんか前回読み直したらすごく中途半端でした・
読んでくださった方申し訳ございません<++>

第二話ヒロイン登場！！です。

ーここは江戸歌舞伎町の一角にある某コンビニである。

ここに少し変わった男が入ってきた。その男は銀髪で、死んだ魚のような目そして和と洋が混ざったような妙な格好をした・・まあ言わずと知れた万事屋銀ちゃんのおーナー坂田銀時である。

いつもだるそうな顔をしているが今日はいつものにも増してダルそうにしていた。

「ハア・・ったくなんだよ、ちよつと出遅れただけでもうないなんて・・俺のジャンプ。まったくこんな直射日光ガンガンの日によろ嫌がらせですかコノヤロウー。」

グチグチいいながら本売り場まで行くと目の前にあった。

最後の一冊が。

「あっ・・あったあああ！！俺のジャンプ！！」

目を輝かせ飛びつこうとした時、手がニユツと伸びてきてジャンプを取ってしまった。

驚いてばつとその方向を見ると女性がジャンプを持っていた。

前髪で隠れてよく見えないが若そうだ。

「あのーねーちゃん？ちよつといい？」話しかけると

「何ですかあ？」ニコツと笑いながらこちらを向いた。

ブシャアアアア・・・その女性が想像していたよりもずっとかわいかったからか

それともいきなり極上スマイルを向けられたからだろうか・・いやまあ日光の当たりすぎだからかもしれないが・・銀時は情けなくも鼻血を出して倒れてしまった。

「いやあ、もちもち、悪いねえ。もちもち」鼻にティッシュをつめながら銀時は言った。

あの後彼女は倒れた銀時を引っ張って外に連れて行き手当をしてくれたいえ団子をご馳走してくれるというのだ。

「いえいえ、あたしが坂田さんのジャンプを取っちゃったからショックで倒れちゃったんだし・・気にしないで。」そう言ってニコツと笑った。

（うっそんな理由じゃあねーんだけど・・・）

「あっそういやあんた名前は？それにこの辺じゃあみかけねえ顔だがどっから来たんだ？」

「ん？あたしの名前はね・・・」

「キタカワセイホ？それが今日新しく入ってくる女隊士の名前ですかい？土方さん。」

「ああ、俺のむかしのなじみでな。」そのころ真選組屯所では土方が一番隊隊長の沖田総悟となにやら話していた。

「ふうん・・ほんとに女なんですわい。じゃああのうわさはほんとなんですわ？」

「ああ？うわさ？」

「ええ、土方さんの昔やっちゃった女を真選組で面倒見なくちゃなんねえって言う・・」

「あほかぁ！！んなわけねえだろうが！誰だあそんなふざけたうわさ流したやつわ！！切腹だぁ！！」

「誰って・・そりゃあもちろん・・俺でさあ。」

「やっぱりか！そうだと思ったわ！」

「だって女なんかぜってえ入れなさそうな土方さんが入れるって事はそんな理由かと・・違えましたか？」

「違うに決まってるだろうがっ！」

「ええゝ。」「ええじゃねえよ！」そんなことを言っていると近藤が部屋に入ってきた。

「やめろ総悟。」入ってくるなりまじめな顔してそう言うのでフオーしてくれるのかと思えばこう続けた。

「いいか、総悟。男ってのは時にはどうしても責任をとらな・・・」

「んなわけねえだろがああ!!」思い切り近藤をなぐってからふと思った。

(ぜんぜん進まねえなあ・・・)

第二話ヒロイン登場!!です。(後書き)

ほんとに進みませんね・・

第三話口にものがはいつてるときはしゃべっちゃダメ！(前書き)

今気づいたのですが読みにくいですね・・

書き方を付けます！！

後、また団子屋に戻ります。

第三話口にものがはいってるときはしゃべっちゃダメ!

土方達が屯所で騒いでるころ・・・

歌舞伎町のある団子屋に二人の男女が大声で争っていたいた。

通りすがりの人々は恋人同士のけんかかとも思うだろう。

こんな会話をしてるとも思わずに・・・

「だーかーらージャンプで今いきがいいのはやっぱりぬ○りひよ○の孫だって!」と女性Ⅱ星螢が言う。

「いーや違うね! それもいいけど一番はめ○かボツ○スだろ! なんとってもうすぐアニメ化すんだからな! のりに乗ってるって。」と男性Ⅱ銀時は言う。

「でもぬ○りひよ○はもうかなりやってるんだよ? アニメってのは始まってからが大変なんだから」

「いやいや、ぞうだけどぼ・・・」

「ってだびじょぶぶ!？」

まあ、すぐに大声をだし過ぎて二人共声ががらがらになってきたので一旦休戦することになったが：

その後お茶を飲んでいると

「へっ・・・へくしょん!!!!」

「んっ、大丈夫か？」

「んっ誰かうわさしてるのかな？」

「で、マジなのか？真選組に今日入隊するってゆうのは。」

「そうだよー北河星螢ちゃんはめっちゃ強いんだからー。」

ニコニコしながら細い腕に力こぶを作ろうとする彼女を見ながらさらに質問をした。

「てかよう、あそこって女は入れんのか？一人もいねーだろ。」

「トシくんが入れてくれるって言ってたもん！まあ、こういうコネがなくちゃ無理だと思うけどね」

お茶をすすりながら答える。

トシってあいつのことだよなーと、面白くないと思いながらやっぱモテルからこんな知り合いがいるのかとも思う。

そこで疑問がわいた。

「第一さ、何であんなむさくるしいトコ入ろうと思ったわけ。あん

たならアイドルとかでもなれると思うぜ。」

「えゝそんなわけないよゝアイドルってかわいくないといけないんだよ?。」

「あつあのなあ・・・」まるで自分はいかしくないみたいに言う星蜚にツツコミを入れたくなる。

なんだって、こげ茶色の美しく長い髪、驚くほどに白い肌、スタイル抜群で銀に輝く大きな目

ここまで誰もがうらやむ物を持ちながらそういわれると皮肉にしか聞こえない。

「まあ、いいけどよ・・・そだお前今日いかねえとなんねーんだろ? まだ時間いいのか?。」

しばしの沈黙。

「あ・・・ああああああ!!!」そして絶叫。

あわてて耳をふさぎながら銀時は? 然とする。

「どどどどうしよゝゝゝ!!! 10時に来いって言われてたんだつたゝゝおっ怒られる!。」

そこまで言うとはっと銀時のほうを向き直り早口で言った。

「ごめん! あたしもう行くね! それじゃまた今度!。」

そこまで言いあつという間にはるか向こうに走っていった。
あつという間でしばらくポカンとしてたがやがて重大なことに気が
ついた。

「団子代もらっていない・・・。」

第三話口にものがはいつてるときはしゃべっちゃダメ！(後書き)

こんなもんでどうでしょう？

次は、土曜日に更新したいと思ってます。

ご感想お願いします。

第四話鬼の剣刃いざ参らん！（前書き）

うう・・読み仮名の書き方がわかりません・・
誰か教えてください< ; ; >

第四話鬼の剣刃いざ参らん!

コツ・・コツ・・コツ・・

男は逃げていた。

ーやばい・・やつが来る・・やつが・・

男は疲れていた。上の者にひたすら酒を飲ませゴマをすり・・もちろん自分も飲んでいた。

そして憔悴しきったところに奴等はやってきた。

ー悪魔だ・・あいつは悪魔なんだ・・

男はまださつき自分の身に起こったこと二いまいち現実味を持てなかった。

奴等は宴会場にいきなり入ってき仲間を次々と斬っていった。

誰が言ったんだろう。逃げろ、と自分が言ったのかもしれない。

やつは最初はおとなしかった。だがやつは一人の・・そう一人の悪魔が傷つけられた時に変貌した。頬に銃弾がかすっただけの傷だった。

ほかの悪魔が傷ついても見もしなかったのにその悪魔に傷がついた途端変わった。

やつは舞うようにして仲間を壊していった。

斬つたのではない。傘を一本持ちその先から火を吹き足と腕を使いあれだけ動きまわって息も乱さず。

男は疲れ切っていた。扉に身を潜め悪魔が通り過ぎるのを待った。

ガタンツ体が震え扉にあたった。

コツ・コツ・コツ・ピタ

足音が止まった。

男はそつと足音の方向を見ようとした。

だがその前に頭の上から殺気がした。

見上げようとしたが首はあがらなかった。

その男の首はもう胴体にはついていなかった。

男を殺した悪魔はいつしかこう呼ばれた。

鬼の劔刃「おにのやいば」
・ ・ ・ ・ ・ 鬼刃「ひめ」、と

—	
.	.
—	
.	.
—	—
.	.
—	—
.	.
—	—
.	.
—	—
.	.
—	—
.	.
—	—
.	.
	.
	—
	.
	—
	.
	—
	.
	—
	.
	.
	—
	.

ここは男だらけのむさくるしい場所NO, 1といわれているところ

真選組屯所である。

しかしここに、容姿端麗、スタイル抜群のスーパーレディがやってきたらどうなるだろうか。

まあ、もちろん・・・

「「おはようございます！！北河隊長！！」」隊員たちが整列して部屋の前に立っていた。

「お・・・おはよう・・・」・・・こうなることだろう。

星螢は部屋を出てすぐいきなり隊員たちからのおはようコールに戸惑いながらも笑顔で返す。

そして目がハートになっている隊員たちが邪魔でご飯食べにいけないアと思うところに一番隊隊長の沖田がバズーカをぶっ放し登場というのが星螢が来てからの毎朝のスタイルだった。

「おはよう、総悟君。今日もありがとね。」

「いやあ、この位あたり前でさア。にしても毎朝毎朝あいつらもこりねえですねェ。」

「ふふ、そうだよねえ。てゆうか大変だね、隊員さんって。毎朝自分の隊長を朝起きるの待たないといけないなんて。」

「・・・いやいや義務じゃねえですから・・・」

などと話しながら食堂にいき、「あつトシくん！！おっは〜」

「ん？ああ。」土方はご飯を食べながら返事をした。

「今日もマヨネご飯？それおいしいのゝあたしも真似しようかなあ」
今日も土方の前にはご飯にマヨネーズをとぐろじょうにかけた通称・
土方スペシャルがある。

「だめですよ、星螢さん。こんなもん食ったら脳みそ腐ります。て
か土方さん。それ星螢さんの前で食べんのやめてくだせィ。真似し
てあんたみたいないたい人になったらどうするんでィ。」

「誰がいたい人じゃこらァ！！つか悪影響及ぼすんだったらてめえ
だろうがあ！！」

「ねえ、これ結構おいしいね。」

「俺の食うなあ！！」

「あゝあ。けがした責任とって死んでくだせい。」

「お前は何かにつけて俺に死んでほしいだけだろうがあ！！」

ギャーギャーやかましい三人を見て隊士たちの一人が言う。

「でもよう、こうみたら普通の女子なのにさ。あんとき怖かったよ
なあ。」

「ああ、あの攘夷浪士たちが宴会場に乗り込んだ時だろ？副長に銃
弾がかすっただけなのになあ。」

「そうそう、知ってるか、あの後北河隊長がなんて呼ばれてるか。」

それはな、といって一度きってから続けた。

「鬼を護る剣の刃のような存在でどこぞのお姫様のような可憐な容姿・・・鬼の剣刃・・・」

鬼刃「ヒメ」

真選組三番隊隊長・北河星螢「キタカワセイホ」は鬼刃と呼ばれるようになった。

第四話鬼の剣刃いざ参らん! (後書き)

ごめんなさい・・・土曜日とか言っというて日曜日なうえ内容
これじゃあだめですよね・・・
でも感想・評価は嬉しいです!

第5話自己紹介は簡潔に（前書き）

ガーン!! そ・そんなどうして声優ランキングに杉田さんと中井さんがはいってないんだ~~~~!! ちよつとショックです・・
<ーー..<

エドの声優さんは好きです。

第5話自己紹介は簡潔に

屯所―

ざわざわざわ

「えーみんな静かに！」近藤は立ち上がり言った。隣には土方が座っている。

これから始まるであろう事に隊士たちは浮きだっている。
大体静まったところで続けた。

「えーみんなもう知っていると思うが、今日来る隊士はしらねえ奴
がいたら困ると思うのでな、軽く紹介することにした。」

そういい、入ってくれと戸の方を向いた。

シーン・・・

あれ？まだ入ってこない・・・え？てか心の準備できてたのに・・・

異様な空気が出てきたころ、

ドタドタドタドタ

騒がしい足音が聞こえてきた。

やっと来るみんながそう思ったとき・・・バン！！！！

「どわアアアア！」 黒い物体が扉ごと飛び込んできて近藤ごと吹っ飛ばした。

隊士達が啞然としている中黒い物体は立ち上がった。

「イタタタ・・・・頭ぶつけた・・・・」さらに息を呑んだ。

その黒い物体は美しいこげ茶の髪を下のほうで団子にし、隊服を美しく着こなしている。

つまり超美女なわけで、近藤が蹴り飛ばされたのにも拘らず隊士達のボルテージは上がった。

「うおおおおお!!」 「お名前は？」 「趣味は？」 「誕生日は？」 「あいつの弱点は？」 「誕

質問攻めである。一つ関係ないのがあったが・・

その時いままで黙ってた人物・土方が動いた。
ゆらりと立ち上がり口を開いた。

「うるせええええええええええ！！！」

[illegible]

― 宴会会場

「それでオラア言っちゃったんですよ。『おいジョージそりゃねえだろ・・・』」

隊士が赤い顔をして大声で話している。

あの大シャウトの後ひとまず静まり返りその美女に「わりイ。てきとーに自己紹介してくれ。」

と言い、隊士達の注目が集まる中で、

「えっと・・北河星螢、B型のおうし座、趣味は戦うk・・散歩です☆」とまあにこやかに返した。

そして現在みんなの強い要望で起き上がった近藤に宴会の許可を^奪も^{い取った}らったのだ。

「それでね北河さん・・「いやこっちの話をきいてくだ・・「いやこっちd

今、みんなで星螢を囲みしゃべっている。それを星螢はにこやかに聞いているのだ。

「すごい人気ですねイあの人、土方さんは行かなくていいんですかい？友達なんでしょう？」

沖田は茶化すように言った。

「かんけえねえだろ。」土方はわかっているのでそっけない。

「ちえっ！ああいう風にアホ面下げてるとこ見れるかと思ったのに・ほんとにいいんですかい？」

「ほっとけって言ってんだろ！つか、ちえって言うな、ちえって！」
「ちっ！」 「おまえな・・

こんなやり取りをしていると沖田の前に影ができた。「誰でィ・・・！？」

目の前に星螢がいた。じっと見ていると思えばニコツと笑った。

「な・・・なんですか・・・ってわば！？」いきなり沖田を胸にうめた。

隊士達が目を見開いたが気にせず土方のほうを見て言った。

「かゝわゝいゝ！！トシくん以外は全員むさくるしい男かと思った
らこんなかわいい子もいたんだね。名前は？年齢は？どこの子？」

目をきらきらして尋ねる星螢に胸元を指差しながら言った。

「そんなん本人に聞け。・・・あと死ぬぞ、そのままだと・・・」

へっ？といった見ると沖田は苦しそうにタップしている。

「あっごめん！大丈夫？」沖田は苦しそうに咳をしてから文句を言
おうと思って顔を上げたが、銀色の瞳を見ていると豊富な胸の感
触を思い出してきた。

赤くなりながら「大丈夫でさァ・・・」そう聞くと「よかった！こ
れからよろしくね！！」と極上スマイルを見せた。

何かが目覚めた瞬間だった。

その後から沖田は星螢に近寄ってくる男を散らしたらしい・・・

！・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—
—・—

中庭―

星螢がいた。

そこに近づく影が一つ。

「ねえ、あたしここになじめるかな？・・・トシくん。」

影―土方は言った。

「さあな、お前次第だろ・・・なじめそうか？」

「それはもちろん！！からかいがいのある人おもしろい人たちだね！！」

「・・・黒くなったな。」

星螢はそんなことないよ、と笑った。

「トシくん・・・あたしががんばるから・・・護るよ。大切なものを。」

そういつて土方に満面の笑みを見せた。

ああ、土方も少しだけ笑った。

くおまけく

しくしくしく

男が一人泣いていた。

星蛍に蹴り飛ばされたのに誰も気にしなかった人物・

「おれのこととはどーでもいいの・・・？」

近藤は一人泣き酒を飲んでいた。

第5話自己紹介は簡潔に（後書き）

近藤さん出すタイミングを見失いました・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9933x/>

銀魂～鬼刃の日常～

2011年11月17日18時37分発行